

会報

第九号

平成二十三年十一月

川端康成学会

川端康成「人間の足音」を巡って

——人類の陥った宿命

澤田繁晴

『掌の小説』は、これまでに二度通読したと思う。一回目は四十年前ほど前である。二回目は四、五年前である。各篇のタイトルを見てその内容までは思い出せないものが多い。それぞれの作品の内容が、どうでもよいようなものならそれでも納得が出来る。しかし、中にはハッと思わせられた作品もあったはずなのである。人間の、と言うよりはわたしの記憶力の不確かさに少しは失望する。そのような中で、「人間の足音」(女性) 大正14・6) は忘れることが出来ない一篇

であった。心に「ズシリ」と響いたのである。心に「ズツシリ」と堪えたのである。もちろんその時は感覚的な反応だけで、それ以上に深く考えることはしなかった。しかし、何時かは、という思いはあつて、今その時が来たのである。

この作品の主人公は冬から春にかけて膝の関節を病み、右足を切断された男である。この失われた片足の妄執のために、男は病床にあつた頃より、「さまざまな足の幻影に悩まされ」ていた。

その頃彼が目を開けると、きつと彼の頭はさまざまな足の姿の幻の海に溺れてしまふのだつた。彼の脳髓の細胞が悉く足の形をした虫になつて彼の世界を匂い廻るのだつた。

具体的に、二十三種類の足の描写がなされ

ているが、明らかに女性の足と思われるものと、男女の判別がつかかねるも男性の・のものにとに仕分けをして列挙してみる。

*

女が物を跨ぐ時のはにかみながらくすりりと笑つてゐる両足。
べたりと投げ捨てた鯨の脂肪のやうに鈍く太りながら、時には恐ろしい力で緊張する両足。

清水の感覚を躁(くるぶし)から腹に吸ひ上げて浅瀬を渡る両足。

昨日までそつぽを向き合つてゐた爪先がどうして今日からしとやかに顔を見合はせようとするのだろうと不審がつてゐる少女の両足。

顔で微笑みながら脛で笑つてゐるすれつからの女の両足。

街から帰つて足袋から出て涼んでゐる汗ばんだ両足。

昨夜の罪を踊子の良心に代つて舞台の上で嘆いてゐる美しい両足。

*

びくつと動いてから硬直して行く死際

の両足。

馬の腹で股の肉の瘦せた馬の上の両足。ゐざりの乞食が深夜になつて、すつくと伸ばして立ち上がった両足。

母の両足の間から産れた赤ん坊に、おお揃つてゐる両足。

勤先から家に帰る月給取りの生活のやうに疲れてゐる両足。

細いズボンの折目のやうに鋭角的に歩いて恋を捜してゐる両足。

ポケットの中の金(かね)の重みで大股に歩く両足。

珈琲店で踵に女を捨てる歌を唄はせている男の両足。

悲しみを重いと思ひ、喜びを軽いと思ふ両足。

運動家の、詩人の、高利貸の、貴婦人の、女流水泳家の、小学生の両足。両足、両足、両足。

——それよりも彼の妻の両足。(個々の両足についての説明は、森晴雄

著『川端康成「掌の小説」論——「日向」その他』に詳しい。また、他の箇所でも

参考資料に数々言及されている。

足フェチの男性たちに対する作家の過剰なサーピスと取れないこともないが、ここは本筋に沿つて足を失つた主人公の男性の執拗なまでの足に対する「こだわり」と見るべきであらう。

以上は病床での幻影であるが、男は退院後のこととして、「花やかな町通りを眺めるために作つた眼鏡のやうな」珈琲店の露台を恋しがっている。ステッキを伸ばせば、道行く人の頭を叩く事が出来る位に低い二階の露台である。「何よりも先づ人間の健かな両足が交る交るに地を踏み姿を貪り眺め、その足音に聞き惚れたかつた」からである。

間もなく、「一年中で人間の足が一番美しい」初夏が到来して男は退院、珈琲店の露台から道行く人々の足を、一心になつて見下ろし、その足音を拾い上げようとして「厳かに耳を澄ませた。」当初は、「湖水に降る雨の音のやうに、彼の魂に道行く人々の足音が降り注いだ。疲れた彼の頬は微妙な喜びの表情で明るんで来た。」のである。次の引用は重要である。

しかし、だんだんその喜びの色は消えて行つた。——そして顔が蒼ざめると同時に、彼は病的に眼を開いた。

「お前は分らないか。人間はみんなびつこだ。ここに聞えて来る足音で両足の音が健かに揃つているのは一つもない！」
「あら、さうかしら。さうかもしれないわね。——人間には心臓だつて片一方にしかないんだから。」

「しかも足音が乱れているのは人間の足のせいばかりとは思へない。心も澄まして聞くと魂の病氣を乗つけてゐる音だ。肉体が大地に向つて悲しげに、魂の葬式の日を約束してゐる音だ。」

(中略)

「人間が二本の足で立つて歩くやうになつた時に、人間の魂の病氣が始まつたのだから、両足の音の揃はないのも当然かもしれない。」

会話の相手は、男の妻である。厳密に言えば、四足(よつあし)が必ずしも100%安

定していたとも思わないが、生物の生成上から見て、二足よりも無理がなかったとは言えると思う。二足歩行になって、体と心の病がより多く発生したということまでは分る。しかし、決定的なのは「手」の存在である。私はここで「二足歩行」を敷衍しようと思う。

「足」と「魂」の間に「手（他でもない、それは「失われた二本の前足」である）」という新たな媒介物を置いてみようと思う。幾何学における補助線のようなものである。このようにすると、足と手の因果関係が明確になる。手はそれまでの機能を失うことにより、余分なものになった。一般的には、必要性がなくなった器官・部位は退化する。ところが、手の場合は進化した。人間は、二足歩行をするようになってから、脳もより発達したのだと思う。と言うのも、脳は、手の使い道を思索し、お互いが直結・連動し出したからである。「目は頭わになった脳」「手は外部の脳」であるとはよく言われるが、正確には、眼は情報収集の親玉であろう。（手は脳の最前衛の実行部隊）である。手はしかし、良いこととするが、悪さとする。自然発火を観察して、

手は「火」の発明をした。これなどは、その最たるものであろう。これが科学技術発達の礎となり、現在に至る人類の幸福と不幸の原因となった。双面神ヤヌスの誕生である。先にも引用したが、「二本の足で歩くやうになつた時に、人間の魂の病気が始まつた」ということは、このように（手）を媒介することにより、より明確になることと思う。心臓が人体の片方にしかなく、「人間はみんなびっこだ」とは男の発見である。両足の機能上の不規則性に加えて、両手にも大いに責任はあると思う。なぜなら、手は足以上に「びっこ」であるからである。もちろん手は、脳との連動ほどではないとしても、足とも連動している。取り残された二本の足で人体を支えるのは、荷が重すぎるのかもしれない。二足歩行、これが人間の「足音の病氣」「魂の病氣」の原因となり、人類の不幸の始まりとなったのである。

「人間の足音」は、（人類の陥った迷れることの出来ない宿命）を扱った小説である。『掌の小説』の中的一篇「硝子」の中には、次のような一節がある。

人間は獅子（しし）のやうに四足で歩けないと同じく、自分は少年の夢を洗ひ落とすことが出来ない。

「少年の夢」を無くすることが出来ないかどうかはともかく、人間は、もはや四足に戻ることが出来ない宿命にある。「人間の足音」の最後の部分に次のようにある。

やがて、魂の片足を失つたやうな顔で、義足の彼は妻に助けられて自動車に乗つた。自動車の車輪の響きはびっこを曳いて、やはり彼女の魂の病氣を彼に訴えた。

最先端の技術を駆使して製作された車さえも病んでいるのである。（だって、人間の作つたものだもの）でも言うかのように。手の進化がなければ、おそらく人類は何も成し得なかつたであろう。

『掌の小説』の「掌」の字は、「たなこ」

ろ」とも「てのひら」とも読まれている。どちらとも手の内側を指し、手の一部ではある。二本の手は、かつては二本の「前足」であった。二本の後足は二本の前足を「呼ぶ」ことなどはあるのだろうか。

「人間の足音」は、新感覚派の作品とも「シユールの詩」(吉村貞司)とも言われている。加うるに「人間の陥った逃れることが出来ない宿命」を扱った、分量に比べては不思議なほど重い掌篇小説とも言えるのではなからうか。

「母」―母への思慕

佐藤翔哉

「母」は大正一五年三月号の「婦人グラフ」に発表され、三ヶ月後の大正一五年六月に『感情裝飾』(金星堂)に収録された。この作品の構成は夫の日記、夫の病氣、妻の病氣、夫の日記と題された四部構成からなっている。作品を貫くテーマとして、作品名が示す

通り「母」への思慕が根底にある。これまでも多くの論で母恋や母性思慕などが述べられてきたが、今回は「運命」をキーワードに母への思慕を再考してみたい。また、川端康成の境涯との関連が指摘されている論も多いが、今回は川端の伝記的事実とは切り離して論を進めていく。

まず一章では、夫が妻をめとったことが詩的文章をもつて記されて始まる。「わが母もをみななりしよ」という文からは、夫の母は母である前に女であり、逆に考えれば女である妻はこの先母になるという予測が成り立つ。さらに、妻に対し「よき母になり給へよ」という未来への願いが記され、夫は妻を通じて母への思慕を一層強めていることがわかる。そして、「われわが母を知らざれば」と続き、母への思慕は夫自身の体験が元になっているということが告げられる。ここまでは一章であるが、この一章だけを讀んだだけでも、夫の母と妻がダブルイメージとして織り込まれ、夫の思いが感傷的に訴えかけてくる。

二章は、夫の病氣に対して妻との会話が交

わされている場面が展開され、妻は夫に対する愛から自分にもその病を移してほしいと伝える。しかし夫はそれを受け入れない。なぜなら、自身の幼少期の体験を踏まえ、我が子には良き母を持たせてやりたかったからである。しかし、病は確実に夫の体を蝕み、黴菌を飲もうと飛びかかる妻を必死に組み伏せたとき母体の象徴である乳房に夫は血を吐いてしまう。この瞬間に妻の先行きが暗示されている。

三章に移ると、そこには病を患った妻の姿がある。子どもは病室に入れてもらえず泣き出す。それを見て、夫が自分も過去に母の病室へ入れてもらえなかったことを妻に告げると、妻は「同じ運命なのね。」と言うが夫は「運命」は「大嫌い」だと言い認めない。しかし、傍から見ても両親と夫と妻が同じ病を患ったこと、そのときの夫と子供の年齢が同じ三つのときであること、襖に体をぶつけたことなど、この話はどうしても運命としか受け取れない事柄で満たされている。ここでも、夫の両親と夫と妻がまたしてもダブルイメージとして写し出されている。

だが、一つだけ「運命」を免れたと思われ
る点がある。子どもの性別である。まず病を
患ったのは、夫の父であり、次世代ではその
息子である夫が病を患う。ならば次は夫の子
は息子であり、その息子が病を患うのが妥当
だろう。しかし、夫の子は息子ではなく娘だ
った。なぜ娘なのか。それは、やはり母への
思慕を描きたかったからである。夫の子が息
子であれば、成長しても母親にはなれない。
そのときは運命の呪縛といったテーマにな
ってしまうだろう。しかし、娘であることに
より、未来の母の存在が描かれ、母への思慕
へと繋がっていく。

その後、死期を悟った妻は、遺言として夫
に自分の運命を幸福なものだったと告げ、子
供には「楽しく結婚させてやつて下さいまし
ね。これが私の遺言なの。」という言葉でこ
の章は閉じられている。妻の魂の訴えが切な
く響く場面である。妻は、よき母になれたの
だろうか。夫の看病をしているときは子供の
ことよりも、自身も夫と同じ病を患い傍にい
たいという、妻としての愛情が勝っていたの
だが、死を前にしてこの言葉には母親とし

ての愛情が現れている。

四章では、妻が娘に変わった他は一章の詩
的文章がほぼ同じ言葉をもって繰り返され
ている。このときには、娘への訴えかけの言
葉「われもわが母を知らざれば」から、妻が
亡くなったことがわかる。ここで記されてい
る「も」からは、一章の夫の姿とは大きく変
わっていることが読み取れる。大げさに言え
ば一章では押しつけがましいものであった
のが、ここに来て優しさを含んでいる。例え
死すとも、妻からの遺言で母なる愛情を感じ
た夫は、この子は母の愛情に包まれていると
明るい未来への希望を抱いたのである。

初めから思い起こしてみると、一章では
母・妻のダブルイメージ、四章ではそこに娘
が加わる。さらに、三者は過去・現在・未来
と時間的な三重構造も示している。以上のこ
とから、この作品は母への思慕をテーマに三
位一体をもって描かれた作品と読むことが
出来る。

【自著紹介】

「をさなごころ」と「むすめごころ」

中嶋展子

『川端文学の「をさなごころ」と「むすめ
ごころ」——昭和八年を中心に——』を近日、龍
書房から出版予定です。

この本は、川端文学の「をさなごころ」と
「むすめごころ」を考察した第一章、川端康
成の少女小説についてまとめた第二章、『眠
れる美女』と昭和八年の関わりを示し同時代
評を掲載した第三章から成ります。

平成十五年三月に「片腕」論を書いて数年
後、川端文学の少女小説に着目し、少女雑誌
から何かをひもといてみたいという目標を
持ちました。実際に、東京タワーのふもとに
ある三康図書館、神奈川近代文学館、旧・大
阪府立国際児童文学館に関東・関西圏の大学
図書館を回って、川端康成の少女小説の資料
を調べました。

平成十九年四月に川端康成の最初の児童向け小説「薔薇の幽霊」について、川端文学研究会で発表をしました。会で研究に携わる先生方にお会いした事で、多くを学び勉強も徐々に深まっていきました。

川端康成の少女小説について、資料を基に作品を読解する中で母恋と同性愛的なテーマが浮かんできました。

少女小説での二つのテーマの出所について考えている時、昭和八年に執筆された小説「二十歳一論」を書き、そこで「幼心」と「女性的なもの」という川端が後に作文の選評で用いた言葉を目にしました。

この選評での言葉を全集から辿っていくと、小説に描かれた「をさなごころ」は母恋を中心にした家族を思う子供の気持が一貫しています。ここでの「をさなごころ」に流れている母恋が、少女小説にも見られたのだと考えています。また、昭和八年を過ぎてからは少女との恋のイメージが描かれなくなる事が分かりました。

少女との恋が「をさなごころ」と共に描かれた背景には、川端の自伝的な小説「父母へ

の手紙」の「第一信」（「若草」昭和7・1）での、

……少女を子供心に帰すことによつて、自分もまた子供心に帰らうといふのが、私の恋のやうであります。

という想いが重要になると考えています。幼少の頃、家族の中で育まれたであろう「子供心」を少女との恋によつて取り戻そうとする、言葉にならない川端の願いが昭和八年頃まであり、それが「をさなごころ」の少女との恋のイメージになったと推察しました。

一方、少女小説での同性愛的なテーマについては、若い女性や少女を描いた青春小説を編んだ作品集『むすめごころ』（昭和12・7 竹村書房）の読解からみていく事にしました。『むすめごころ』の娘や少女にも同性愛的な心情や、その他に相手と自分が同化したかのように感じる気持が作品全体に実感を持って描き表されています。少女小説に匂わされていた同性愛的なテーマは、この作品集によつて描き継がれ「むすめごころ」として若い女性や少女の心に息づいていました。

一見、川端康成の少女小説が目立つ中で、

実際は『むすめごころ』に編まれた青春小説に色濃く若い娘や少女の心情が書き表されており、本筋になっている事が作品集の読解によつて見えてきたと思います。

「むすめごころ」に關しても昭和八年に變化があり、これまで少女や娘らしさを「幼い」「清らか」さで表していたものが、「子供っぽい」様子として描かれていきます。

川端の早い時期の自伝的な小説には、「十六歳の日記」（初出「十七歳の日記」、『文芸春秋』大正14・8、9）で病身の祖父との生活を「清らか」なものとして振り返り、また「篝火」（『新小説』大正13・3）には結婚を考えているみち子に「幼げ」を求める場面が見られます。ここでの「清らか」「幼げ」は、川端が幼少の頃に喪った家族との時間を少女との恋や結婚によつて求めるといふ、後に明かした「子供心」への思いに連なっている。「をさなごころ」にも「むすめごころ」にも横たわる川端文学にとつて大本の問題に行きあたる事になると考えられます。そして、「をさなごころ」と同様に昭和八年以降、少女との恋への願いが込められた「幼い」「清

らか」という表現は消えていきました。

川端康成の少女小説研究から、川端文学での昭和八年の重要さに気付き、「をさなごころ」と「むすめごころ」の文学的な表現の流れを辿ることができました。また、川端文学の一端をどの作品も担っている事が感じられ、川端の作品への想いの広がりが見えられたように思います。

目次

第一章 川端文学の「をさなごころ」と「むすめごころ」

I 昭和八年の川端康成——「をさなごころ」と「女性的なもの」／II 「二十歳」論——「幼心」と「女性的なもの」——III 川端康成と少女の文集——西村アヤ・石丸夏子・山川弥千枝を中心に／IV 『むすめごころ』論——「幼い清らかな少女から「子供のやうな」娘へ

第二章 川端康成の少女小説

I 『乙女の港』論——「魔法」から「愛」へ・中里恒子草稿との比較から／II 川端康成の少女小説——「少女倶楽部」掲載作品の素材を中心に——III 川端康成と吉屋信子——片岡鉄兵『薔薇の戯れ』から——IV 『薔薇の幽霊』

と博文館「少女世界」

第三章 昭和八年と『眠れる美女』

I 『眠れる美女』論——祈りとなくさめ——II 『眠れる美女』の同時代評
参考文献／初出一覧／後書き

『川端康成の方法——二〇世紀モダニズムと「日本」言説の構成——』

仁平政人

本書は、川端康成の初発期から戦後に及ぶ文学活動について、特に二〇世紀のモダニズム文学（芸術）との交通に焦点を合わせて検討を行ったものである。

川端康成が大正期において、横光利一らと共に「新感覚派の旗手」として活躍し、以後も同時代のモダニズム文学の展開に対して深い関わりを示し続けていたということは、よく知られている通りである。だが、このような川端文学のモダニズム的な性格に関する

る総合的な究明は、十分に進められてきたとは言えない。こうした研究状況は、川端に対する今日の評価が、戦後における「伝統」再評価の文脈と連動して、(日本的・伝統的な作家)といった評価の枠組みとあわせて成立してきたことと密接に関わっていると思われる。そしてこうした評価の枠組みの下で、川端と「モダニズム」の関係という問題は、その固有の「資質」に基づくものとして曖昧に扱われ、あるいは一時的・非本質的な問題として位置付けられる傾向があった。このことは、川端研究の文脈において「日本」や「伝統」といった概念が、往々にして実体化・自明化されてきたこととも深く連関している。以上の意味で、川端文学の性格を二〇世紀モダニズムの地平において再検討することは、従来の川端評価が持つ本質主義的な傾向を問い直す回路にもなると考えられよう。

本書では第一に、川端における「モダニズム」という問題を、特に川端の「言葉」をめぐる問題意識と、その小説の方法的な性格との関連という問題に照準を合わせて検討することを課題とした。その出発期から晩年に

いたるまで、川端は〈言語論的転回〉以後と
いうべき認識に立脚して、「リアリズム」的
文藝観を否定し、「言葉」をあくまで問題化
しつつ多様な表現の実験を試みるような立
場を示し続けている。そしてそれは、川端テ
クストの様式的な特質とも明瞭に関わって
いると見られる。本論では、このような川端
の理念的立場の形成・展開の過程について追
求するとともに、小説テクストの性格を様式
的な水準に注目しながら詳細に検討し、小説
の方法と理念的な立場がどのように関わっ
ているか解明を試みた。

また、本書の第二の課題は、川端における
モダニスト的な立場と「日本」・「伝統」をめ
ぐる言説とのつながりを検討することであ
る。特に戦中から戦後にかけて、川端は「日
本」や「古典」・「伝統」をめぐると言説を数多
く提示しており、旧来の〈日本的・伝統的な
作家〉という川端評価の枠組みは、しばしば
こうした諸言説を根拠として形成されてき
たと考えられる。この問題に関して、本書で
は川端の「東洋」をめぐると言説がそもそも大
正末期のモダニズム／アヴァンギャルドの

言説との交通から生じたものであり、以降の
川端の「日本」をめぐると言説の論理も、基本
的にその延長上に形成されているというこ
とを示した。

なお、本書の目次は以下の通りである。

はじめに — 川端康成とモダニズム —

第一部 川端康成の初発期 — 「新感覚主義」
の生成と射程 —

序 — 問題の所在 — / 第一章 初発期川
端康成の批評 — 「表現」理念の形成 — / 第

二章 「招魂祭一景」論 — 疲労した身体、
夢見る言葉 — / 第三章 「青い海黒い海」

論 — 言葉の〈速度〉と〈遅れ〉 — / 第四章
「春景色」論 — 「写実」とその解体 —

第二部 昭和初年代の川端康成 — 方法の諸
展開 —

序 — 問題の所在 — / 第一章 川端康成に
おける「新心理主義」 — 方法としての〈心

理〉 — / 第二章 「抒情歌」論 — 「夢」の
破れ目 — / 第三章 「散りぬるを」論 — 「合

作」としての「小説」 —

第三部 川端康成の戦後 — 「新感覚主義」

のゆくえ —

序 — 問題の所在 — / 第一章 「反橋」連作

論 — 川端康成の戦後 — / 第二章 『山の音』
論序説 — 「老い」のモダニズム — / 第三章

「無言」論 — 無言のまほりを廻る — / 第四
章 戦後の川端テクストにおける〈記憶・

忘却〉の方法 — 「弓浦市」を中心に —
おわりに

(東北大学出版会 刊)

……お知らせ……

* 会報の原稿を募集します。

川端康成に関するエッセイ、作品論、作家
論。自著紹介(川端以外も可)、今後の研究
目標など。

また、川端周辺の作家や評論家に関する、
エッセイや評論なども募集します。

以上、編集(森 晴雄)宛に直接お送りく
ださい。

〒152-0001

目黒区中央町1-2-17

事務局 銀の鈴社内

〒248-0005

鎌倉市雪の下3-8-33

1 単行本

開館25周年記念特別展 図録「川端康成と三島由紀夫 伝統へ、世界へ」鎌倉文学館
鎌倉市芸術文化振興財団 平成22年10月2日

山内静夫「ごあいさつ」 川端香男里「稀有な出会い」 松本徹「無二の親友」

堀江敏幸「光学的な関係」

佐藤秀明 「川端康成と三島由紀夫 伝統へ世界へ」

第一部 日本文学のノーベル賞

「スウェーデンからの吉報」「ノーベル賞への道」「美しい日本の私」

第二部 鎌倉文庫からの出発

「出会う才能」「新炙する才能」「開かれた才能」

第三部 伝統へ、世界へ

「世界の川端」「時代の声、時代への声」「巨星逝く」

仁平政人 川端康成の方法—二〇世紀モダニズムと「日本」言説の構成—

東北大学出版会

平成23年9月13日

川端康成・東山魁夷コレクション展 知識も理屈もなく、私はただ見てゐる。

発行 川端香男里・東山すみ

平成二十三年

平山三男 川端康成・東山魁夷 二人のめぐりあい

水原園博 川端の森、東山の森 展覧会三五〇〇日の記録

図録 第一章 川端康成と東山魁夷 魂の交流

第二章 川端コレクション

第三章 文学者・川端康成

第四章 東山魁夷のスケッチ

第五章 東山コレクション

2 雑誌・紀要……論文・評論・エッセイ

森本穂 魔界の住人 川端康成—その生涯と文学

「文芸日女道」509～521

平成22年10～平成23年10月

川端康成「篝火」近代文学名作コレクション 18

「ワイエムビジネスレポート」 23年9月

森 晴雄 川端康成「化粧の天使達」……「裾」「白髪」「恩人」「化粧の天使達」の
構成 「雲」平成22年10月～23年1月

「望遠鏡と電話」

2月～5月

「舞踊」

6月

「空家」

7月・8月

「舞踊会の夜」

9月～11月

ゆりはじめ サイレント映画 田中絹代「伊豆の踊子」

「室生犀星研究」33

平成22年10月

金森範子 蚕（こ）は天井に繭作れるか—「西方寺」解明のころ

「小品」第三十集小品の会

11月

野中潤 川端康成「日向」論—事実と虚構のあいだ

「現代文学史研究」第十五集 現代文学研究所

12月

澤田繁晴 川端康成「末期の眼」—七人七様の宿業 「花粉期」臨時号 平成23年1月

原裕美子 川端康成『千羽鶴』論—<幕>の解釈と<幸福>の希求

「国語研究」25号

上越教育大学国語教育学会 2月

- 山中正樹 「文芸時代」と川端康成—川端康成の言語観<二>
「桜花学園大学人文学部 研究紀要」第13号 平成23年
- 李聖傑 川端康成における戦争体験について—「敗戦のころ」を手がかりに
「早稲田大学大学院 社会科学研究所 ソシオサイエンス」17 3月
- 大石征也・亀本美砂 詩人・野上彰の形成と発展—川端康成宛書簡に見る戦中・戦後【中】
「水脈」第十号 徳島県立書道館 研究紀要 3月
- 呉悦 川端康成と沈從文における伝統への回帰—「古都」と「辺城」の比較を中心として
「多元文化」11 3月
- メベッド・シェリフ 圧縮と移動 川端の作品における夢
「東海学園大学研究紀要 社会科学研究編」16 3月
- 布施田哲也 昭和二十年の川端康成 鎌倉の川端康成、月を仰ぎ、鹿屋を思った
「群系」27 7月
- 森田晴美 川端康成のふるさとを巡る 「雲」 7月
- 谷口幸代 川端康成『住吉』連作の<原文>と<語り> 「解釈と鑑賞」 7月
- 馬場重行 「見えないもの」を見るカー—川端康成「金塊」の<文脈>
「日本文学」 8月
- 坂根武 川端康成「舞姫」寸感 「文芸日女道」519 8月
- 川端康成「みづうみ」—桃井銀平のエロチシズム 「文芸日女道」520 9月
- 曾根博義 犬も歩けば 近代文学資料探索(21)『川端康成集 第一巻』
「日本古書通信」 9月

3 単行本所収論文・評論・エッセイ

- 井上二葉 「第七章川端康成『月下美人』と音楽」「第八章川端康成『秋の雨』と音楽」
「第九章 川端康成『落葉』と宮城道雄の音楽」
『日本近代文学と音楽—堀 辰雄・芥川龍之介・宮沢賢治・川端康成・室生犀星—』
丸善仙台出版サービスセンター 平成22年12月10日
- 堀江宏樹・滝乃みわこ 第五章 近現代文学 川端康成『美しい日本の』少女たち—「朝雲」
『乙女の日本史 文学編』実業乃日本社 10月20日
- 嵐山光三郎 川端康成と「銀座キャンドル」『文士の舌』新潮社 12月20日
- 草薨洋平 川端康成と湯ヶ島温泉『作家と温泉 お湯から生まれた27の文学』
河出書房新社 平成23年1月30日
- 立山萬里・川端康成 川端康成のパラフィリア三部作—「みづうみ」「眠れる美女」「片腕」
の世界
『天才作家のこころを読む』文芸春秋企画出版社 5月30日

4 その他

- 『幻』 川端康成「白い満月」、編集部編「人と作品」
百年文庫39 ポプラ社 平成22年10月12日
- 川端康成 「風雨」500号記念特集 文士たちの筆跡 「波」 平成23年8月

補遺

- メベッド・シェリフ 母の損失という語り—川端康成の『住吉』連作における転移と反復
「東海学園大学研究紀要」第十五号 人文学・健康科学研究編 平成22年3月
- 片岡美有季 「禁制」と「まどわしの夢」—川端康成「眠れる美女」における性の<再生>
「立教大学大学院 日本文学論叢」第十号 8月
- 仁平政人 川端康成「青い海黒い海」—言葉の<速度>と<遅れ>
「文芸研究—文芸・言語・思想」第170集 東北大学文学部 日本文芸研究会 9月
- 李聖傑 川端康成『みづうみ』をめぐる—魔性の原点へ—
「早稲田大学大学院 社会科学研究所 社学研論集」16 9月

- 150 <二> 新編小説の自序(一) 秋田県立図書館蔵本
 151 新編小説の自序(二) 秋田県立図書館蔵本
 152 新編小説の自序(三) 秋田県立図書館蔵本
 153 新編小説の自序(四) 秋田県立図書館蔵本
 154 新編小説の自序(五) 秋田県立図書館蔵本
 155 新編小説の自序(六) 秋田県立図書館蔵本
 156 新編小説の自序(七) 秋田県立図書館蔵本
 157 新編小説の自序(八) 秋田県立図書館蔵本
 158 新編小説の自序(九) 秋田県立図書館蔵本
 159 新編小説の自序(十) 秋田県立図書館蔵本
 160 新編小説の自序(十一) 秋田県立図書館蔵本
 161 新編小説の自序(十二) 秋田県立図書館蔵本
 162 新編小説の自序(十三) 秋田県立図書館蔵本
 163 新編小説の自序(十四) 秋田県立図書館蔵本
 164 新編小説の自序(十五) 秋田県立図書館蔵本
 165 新編小説の自序(十六) 秋田県立図書館蔵本
 166 新編小説の自序(十七) 秋田県立図書館蔵本
 167 新編小説の自序(十八) 秋田県立図書館蔵本
 168 新編小説の自序(十九) 秋田県立図書館蔵本
 169 新編小説の自序(二十) 秋田県立図書館蔵本

- 170 新編小説の自序(二十一) 秋田県立図書館蔵本
 171 新編小説の自序(二十二) 秋田県立図書館蔵本
 172 新編小説の自序(二十三) 秋田県立図書館蔵本
 173 新編小説の自序(二十四) 秋田県立図書館蔵本
 174 新編小説の自序(二十五) 秋田県立図書館蔵本
 175 新編小説の自序(二十六) 秋田県立図書館蔵本
 176 新編小説の自序(二十七) 秋田県立図書館蔵本
 177 新編小説の自序(二十八) 秋田県立図書館蔵本
 178 新編小説の自序(二十九) 秋田県立図書館蔵本
 179 新編小説の自序(三十) 秋田県立図書館蔵本
 180 新編小説の自序(三十一) 秋田県立図書館蔵本
 181 新編小説の自序(三十二) 秋田県立図書館蔵本
 182 新編小説の自序(三十三) 秋田県立図書館蔵本
 183 新編小説の自序(三十四) 秋田県立図書館蔵本
 184 新編小説の自序(三十五) 秋田県立図書館蔵本
 185 新編小説の自序(三十六) 秋田県立図書館蔵本
 186 新編小説の自序(三十七) 秋田県立図書館蔵本
 187 新編小説の自序(三十八) 秋田県立図書館蔵本
 188 新編小説の自序(三十九) 秋田県立図書館蔵本
 189 新編小説の自序(四十) 秋田県立図書館蔵本
 190 新編小説の自序(四十一) 秋田県立図書館蔵本

- 191 新編小説の自序(四十二) 秋田県立図書館蔵本
 192 新編小説の自序(四十三) 秋田県立図書館蔵本
 193 新編小説の自序(四十四) 秋田県立図書館蔵本
 194 新編小説の自序(四十五) 秋田県立図書館蔵本
 195 新編小説の自序(四十六) 秋田県立図書館蔵本
 196 新編小説の自序(四十七) 秋田県立図書館蔵本
 197 新編小説の自序(四十八) 秋田県立図書館蔵本
 198 新編小説の自序(四十九) 秋田県立図書館蔵本
 199 新編小説の自序(五十) 秋田県立図書館蔵本
 200 新編小説の自序(五十一) 秋田県立図書館蔵本
 201 新編小説の自序(五十二) 秋田県立図書館蔵本
 202 新編小説の自序(五十三) 秋田県立図書館蔵本
 203 新編小説の自序(五十四) 秋田県立図書館蔵本
 204 新編小説の自序(五十五) 秋田県立図書館蔵本
 205 新編小説の自序(五十六) 秋田県立図書館蔵本
 206 新編小説の自序(五十七) 秋田県立図書館蔵本
 207 新編小説の自序(五十八) 秋田県立図書館蔵本
 208 新編小説の自序(五十九) 秋田県立図書館蔵本
 209 新編小説の自序(六十) 秋田県立図書館蔵本
 210 新編小説の自序(六十一) 秋田県立図書館蔵本
 211 新編小説の自序(六十二) 秋田県立図書館蔵本
 212 新編小説の自序(六十三) 秋田県立図書館蔵本
 213 新編小説の自序(六十四) 秋田県立図書館蔵本
 214 新編小説の自序(六十五) 秋田県立図書館蔵本
 215 新編小説の自序(六十六) 秋田県立図書館蔵本
 216 新編小説の自序(六十七) 秋田県立図書館蔵本
 217 新編小説の自序(六十八) 秋田県立図書館蔵本
 218 新編小説の自序(六十九) 秋田県立図書館蔵本
 219 新編小説の自序(七十) 秋田県立図書館蔵本
 220 新編小説の自序(七十一) 秋田県立図書館蔵本